

研究論文

備前焼大甕の容量変遷とその要因

— 内容量記載資料の分析を中心に —

立花唯翔

要 旨

中世の大甕のうち現在の岡山県備前市伊部周辺で生産されていた備前焼大甕は、器高が 60 cm 以上の大甕と定義される巨大な製品であり、内容量を示す線刻が存在するという資料的特徴を有する。この容量に関わる資料的特徴は、国内の他の陶磁器製品に類を見ないような特異なものであると同時に、大甕の消費の様相や中世当時の柁制の変遷をはじめとした制度史・社会史に関わる様々な情報を内包するものである。しかし、備前焼大甕はその容量の持つ情報の重要性が古くから指摘されるものの、容量に関する研究はほとんど行われておらず、不明な点が多い。そこで本稿では備前焼大甕の容量計測から中世における備前焼大甕の器形と容量の変遷を明らかにすること、内容量が記載された大甕の容量変化を整理することを目的に、西日本に分布が確認される 163 点の備前焼大甕を集成し、容量計測を行った。

備前焼大甕の頸部容量を計測した結果、全時代の備前焼大甕は「170 ℓ 以下 (1 類)」、「195 ℓ 以上 (2 類)」という容量を基にした分類ができる。各時期の器形と容量の分析からは、16 世紀後半に備前焼大甕の器形の長胴化と容量の増加が顕著であることが明らかにできた。

また、備前焼大甕の内容量記載資料の分析からは、16 世紀前半から 17 世紀前半における内容量を示す線刻の年代観と容量の変化を整理した。その結果、16 世紀前半から後半にかけて内容量記載資料の容量が増加するに伴って線刻の示す一石の値が大きくなること、三石入りの大甕が衰退し、二石入りの大甕が占める割合が大きくなること、大甕の作りや線刻の表記が丁寧になるなどの変化が確認できた。

以上のことから、備前焼大甕は 16 世紀前半から後半にかけて器形・容量・線刻に大きな変化が確認でき、この時期に備前焼大甕の品質改良が生じると捉えられ、この変化の要因として備前焼大甕の容量の規格保証が要因であると推察される。内容量記載資料の分析から、備前焼大甕の容量の基準となる柁は「壳升」と呼ばれる西日本で広域使用圏を形成する商業柁の容量に近似することが推測される。備前焼大甕の容量が西日本の中世社会における経済活動の一端を反映しているといえるだろう。

キーワード：中世、西日本、大甕、備前焼、容量

はじめに

現在の岡山県備前市伊部周辺で生産された備前焼大甕は、畿内・瀬戸内海周縁部を中心とする西日本の広い範囲で分布が確認され (伊藤 2008)、複数個の大甕を埋設した埋甕遺構や甕棺墓など様々な検出例が数多く報告されていることから、備前焼大甕は中世の西日本で幅広い用途で利用された代表的な貯蔵具であるといえるだろう。

この備前焼大甕であるが、その大甕が有する「大きさ」と「線刻」の 2 種類が資料的特徴としてあげられる。

備前焼大甕の「大きさ」については、器高 100 cm を超えるようなものも存在することから、「備前焼の器種においてばかりではなく、国内の陶磁器全体から見ても最大級の法量をもつ製品群 (上西 2001 653 頁)」と評されるように、他産地の大甕と比較して容量の大

きな製品であることが知られる。

備前焼大甕の「線刻」については、一部の備前焼大甕の肩部に「二石入」「三石入」というような大甕の容量を示す線刻が施されていることがある¹⁾。この容量を示す線刻は、貯蔵量など大甕の用途に大きく関係する容量を端的に理解するという機能的な情報を示すものであると同時に、一目でその大きさを把握できるものであるといえる。他産地の大甕では、このような内容量を示す線刻が確認できるものはわずかであり、このような容量を示す線刻は備前焼大甕を代表する特徴であるといえるだろう。

このことから、備前焼大甕はその大きさと線刻による内容量表示に特徴がある製品であるといえる。この 2 つの特徴は、大甕の機能や用途を考えるうえでの大事な要素であると同時に、内容量を示す線刻・紀年銘・

型式分類などというような様々な情報を組み合わせることで、当時の大甕の生産・消費の様相やその要因となる社会制度や産業の変化などを明らかにする判断材料になる。これは臼井洋輔氏が「秀吉の検地石直しにかかわるわが国の柁制の発達や地域性を側面から調べる手段になるかも知れない（臼井 1984 52 頁）」と指摘するように、備前焼大甕の容量が当時の社会の様相を明らかにする判断材料になる可能性を秘めていることを示している。

ところが、備前焼大甕の容量に関する研究は以前からその重要性が指摘されているものの、ほとんど行われていないのが現状である。これらの点を踏まえて本稿では、中世西日本における備前焼大甕を集成し、容量分析を行うことで、備前焼大甕の容量の変遷とその要因について予察する。

1. 備前焼大甕の容量に関する研究史の現状と課題

備前焼大甕に関する研究は間壁忠彦氏・乗岡実氏・重根弘和氏らによる分類（間壁 1990、乗岡 2001、重根 2003、2014、2022）や伊藤晃氏による全国を対象にした集成（伊藤 2008）などがあり、中世備前焼全体の分類・集成の中で大甕の年代観や各時期の流通の様相が明らかにされてきた。これまでの備前焼大甕に関する研究は、型式分類による年代区分の確立、集成による分布の把握など、年代・流通の問題に焦点を当てて行われてきたといえるだろう。

そのため、備前焼大甕に関する研究のうち、大甕の容量に注目された研究は数例にとどまるに過ぎない。この備前焼大甕の容量に関する研究については、「法量に着目した研究」、「実容量に着目した研究」の2つの流れに基づいて説明できる。

「法量に着目した研究」は、伊藤晃氏・上西節雄氏による紀年銘入備前焼大甕の法量計測（伊藤・上西 1977）や藤原里香氏による備前焼大甕の観察と法量の計測（藤原 2000）がある。これらの研究では、16世紀後半から17世紀前半における時代の資料が分析対象となり、実年代に沿った備前焼大甕の法量の変遷が明らかにされた。

「実容量に着目した研究」については、主に「実容量の検証」という目的のもと研究が深められてきた。主な事例としては、堺環濠都市遺跡（SKT21 地点）で出土した備前焼大甕の線刻で示された内容量と実容量の整合性の検証（堺市教育委員会 1984）のほか、臼井洋輔氏による紀年銘資料を中心とした備前焼大甕の分

析がある。臼井氏は、「二石入」「三石入」と内容量が記載された16世紀後半の備前焼大甕がほぼ同じような大きさであることを指摘し、実際に備前焼大甕3点に水を直接注水することで、それぞれの容量が近似することを明らかにした。さらに、臼井氏は室町時代の柁の容量を算出し、それを大甕の実容量と比較することで、大甕の記載内容の変化が柁制の変化によるものであると推察し、備前焼大甕の容量と柁制の関係性を指摘した（臼井 1984）。この臼井氏による先行研究は、備前焼大甕の容量と柁制の変遷の関係を検討した唯一の事例であると同時に、備前焼大甕の容量の変遷とその要因を予察し、備前焼大甕の容量が持つ情報の重要性を示した論考である。

ここまで、備前焼大甕の容量に関する先行研究を振り返ってきた。これまでの備前焼大甕の容量に関する研究は、法量と実容量に基づく2つの視点に分けられる。それぞれ、大甕に施された文字情報と容量に関する情報を組み合わせて、実年代に基づいた「大きさ」の変遷と記載容量の検証が行われている。しかし、備前焼大甕の容量に関する先行研究は、先述のとおり型式分類や分布に関する先行研究が充実しているものの容量に焦点が当てられた研究が極めて少ないという問題に加えて、「分析の紀年銘資料への偏り」、「中世柁の認識不足」の2つの課題があげられる。

「分析の紀年銘資料への偏り」は、これまで容量の検討が行われてきた備前焼大甕が、紀年銘資料が中心であるという問題である。製作年代が確定する紀年銘資料は、その年代の特徴を決定づける上で重要な資料であることは明確であり、伊藤・上西両氏や臼井氏の先行研究においても各年代の大甕の様相を把握するための実年代資料として扱われた。しかし、備前焼大甕の紀年銘資料はその多くが16世紀後半から17世紀前半の年代を示すものが大半を占めるため、時期的偏りが確認される。そのため、これまでの先行研究では16世紀後半以前の備前焼大甕の容量についてはほとんど検討されておらず、中世全体における容量の変遷については不明な点が多い。

「中世柁の認識不足」は、大甕の容量が検討される際に中世柁の容量への理解が不十分な点に問題がある。中世柁の容量については宝月圭吾氏の先行研究（宝月 1961）などで、近世に入るまで全国各地に様々な容量を有する柁が乱立したことがすでに示されている。しかし、発掘調査報告書などで掲載される容量は「一石＝約180ℓ」という現在の柁に当てはめた容量で単純に認識される場合が多く、備前焼大甕の製作年代の

状況を反映したものであるとはいえない。そのような背景の中で、臼井氏は備前焼大甕の容量の変化を中世の柁制と対応させるために室町時代の柁の容量を算出して比較を行ったが、算出された柁の容量は1例のみであり、中世柁の複雑な乱立状況を示したものであるとは言い難い。文献資料から得られた中世柁に関する知見と考古資料としての備前焼大甕との比較が不十分であることが、中世に製作された備前焼大甕の容量を分析するうえで大きな障壁となっている。

以上のことから、備前焼大甕の容量については時期的偏りのある紀年銘資料の性質により16世紀後半以前の中世の大部分の資料の計測がほとんど行われていないほか、大甕に記載された内容量が現代の柁制に基づいて単純に理解されているという問題がある。この問題を解決するにあたって、紀年銘資料以外の備前焼大甕を加えた容量分析によって、中世全体の容量の変化を追うこと、中世柁の容量を算出し、それを照らし合わせることによって、大甕の容量を決定づける単位の特定を行い、その変遷を明らかにすることが、中世における備前焼大甕の容量の意図を解明するうえで重要なポイントになるだろう。

2. 研究の目的と方法

本稿では先行研究の課題を踏まえて、中世における備前焼大甕の容量の変遷を示し、中世柁との関連性について言及することを目的とする。まず、備前焼大甕を集成し、容量計測を行うことで、中世の各時期における備前焼大甕の容量の特徴と変遷を示す。また、内容量が記載された資料については、記載容量が示す一石を算出し、中世柁の容量と照らし合わせることで、備前焼大甕の容量と中世柁の関連性について予察する。

研究の方法については、以下のとおりである。

(1) 分析資料の集成と分類

まず、容量の計測にあたり資料の集成を行った。本稿で集成の対象とした資料は、近畿地方（ただし滋賀県・奈良県を除く）、中国・四国地方（ただし鳥取県・島根県を除く）、福岡県に分布が確認される備前焼大甕のうち器高が60.0 cm以上（伊藤・上西 1977）であり、実測図で底部から口縁端部まで復元できる、著しい歪みのないものを計163点集成した（表2～5）。集成を行った備前焼大甕は報告書に実測図が掲載されているものがほとんどであるが、紀年銘や内容量が施され重要であると判断したものについては、「Agisoft Metashape」を用いた三次元計測により、実測図を作成した。

また、本稿では備前焼大甕の年代観と分析資料数の兼ね合いから、重根編年（重根 2014）をもとに中世をⅠ～Ⅳの4期に分ける時期区分を設定した。本稿の時代区分と重根編年の対応関係は表1で示したとおりである。

(2) 容量計測の方法と主要分析項目

本稿で行う陶器製大甕の容量計測手段は「円柱集計算法」を採用する。円柱集計算法は実測図を用いて大甕の内面を円柱の総体として捉えるものであり、大甕の内面に細かく積み重ねた円柱の体積（ $V = \pi r^2 h$ ）の合計を大甕の容量とする。

円柱集計算法は実測図が入手できれば比較的短時間で簡単に容量を計測できるという長所があり、縄文土器や土師器の容量計測などに広く活用されている。しかし、この方法は、大甕の内面を円柱の総体に置き換えたものを容量として認識するため、「土器の曲線部分を円柱として直線処理するため誤差が生じることは避けられない（高瀬 2021 206 頁）」と指摘されるように、大甕内面の形状を完全に正確には捉えることができないという課題がある。円柱集計算法による容量計測は個々の円柱の高さ（h）を1 cmに統一して算出する場合が多いが、本稿では個々の円柱の高さを0.5～0.7 cmと細かく設定することで、計測精度を向上させた。

表1 本稿の時期区分と重根編年

| 世紀 | 本稿の時期区分 | | 重根編年の時期区分 (重根 2014) |
|-------|---------|-----|------------------------|
| 13 世紀 | Ⅰ 期 | | Ⅱ A |
| 14 世紀 | | | Ⅱ B |
| | | | Ⅲ A |
| | | | Ⅲ B |
| 15 世紀 | Ⅱ 期 | | Ⅳ A |
| | | | Ⅳ B |
| 16 世紀 | Ⅲ 期 | Ⅲ a | V A |
| | | Ⅲ b | V B |
| 17 世紀 | Ⅳ 期 | | Ⅵ A |
| | | | |

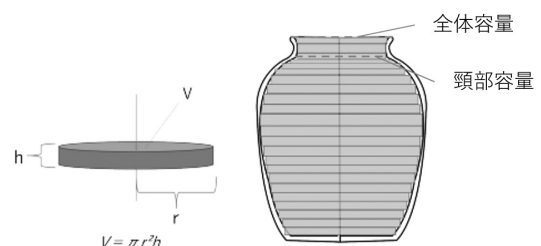


図1 円柱集計算法のイメージ図と計測位置

表 2 備前焼大甕集成表 1

| 番号 | 地域 | 遺跡名 | 器高 (cm) | 胴部 最大径 (cm) | 相対的 深さ | 全体容量 (L) | 頸部容量 (L) | 記載 容量 | 本稿の 時期区分 | 重根 編年 | 紀年銘 | 報告書 番号 | 管理番号 |
|----|-----|--------------|------------|-------------------|-----------|-------------|-------------|----------|-------------|----------|-------------|-----------|--------------|
| 1 | 山城国 | 宇治市街遺跡 | 86.4 | 78.0 | 110.76923 | 276.2 | 263.2 | | I 期 | ⅢB | | 1 | 8 図 -T39 |
| 2 | | 平安京左京六条三坊五町 | 85.6 | 76.4 | 112.04188 | 265.3 | 257.0 | | I 期 | ⅢB | | 2 | 図版 41-8 |
| 3 | | 平安京左京八条三坊九町 | 95.6 | 78.8 | 121.31980 | 311.4 | 298.0 | | I 期 | ⅢA | | 3 | 図 26-234 |
| 4 | | 平安京左京八条一坊十六町 | 80.8 | 69.0 | 117.10145 | 227.9 | 218.3 | | I 期 | ⅢB | | 4 | 図 26-113 |
| 5 | 摂津国 | 大阪城跡 | 89.4 | 79.5 | 112.45283 | 268.2 | 255.3 | | I 期 | ⅡB | | 5 | 図 42-159 |
| 6 | 摂津国 | 兵庫津遺跡 | 68.8 | 73.6 | 93.47826 | 166.8 | 160.2 | | I 期 | ⅡA | | 6 | 図版 126-1188 |
| 7 | 摂津国 | | 90.0 | 80.5 | 111.80124 | 292.0 | 281.0 | | I 期 | ⅢB | | 7 | 91 図 -210 |
| 8 | 紀伊国 | 長寿寺境内 | 68.0 | 62.5 | 108.8 | 131.0 | 125.1 | | I 期 | ⅢB | 1342(康永元) 年 | 8 | 図 1-1 |
| 9 | 播磨国 | 大野遺跡 | 85.5 | 80.0 | 106.875 | 283.3 | 268.8 | | I 期 | ⅢA | | 9 | 図版 8-240 |
| 10 | | 南上山遺跡 | 85.7 | 73.4 | 116.75749 | 281.7 | 274.1 | | I 期 | ⅢB | | 10 | 11 図 SK101-A |
| 11 | | | 86.1 | 70.3 | 122.47511 | 212.7 | 206.5 | | I 期 | ⅢB | | 10 | 11 図 SK101-B |
| 12 | | | 91.2 | 78.6 | 116.03053 | 317.2 | 307.0 | | I 期 | ⅢB | | 10 | 12 図 SK102 |
| 13 | 美作国 | 久田・堀ノ内遺跡 | 61.6 | 57.6 | 106.94444 | 106.4 | 101.1 | | I 期 | ⅢA | | 11 | 508 図 -1227 |
| 14 | | | 82.8 | 73.6 | 112.5 | 231.5 | 224.0 | | I 期 | ⅢB | | 11 | 545 図 -1270 |
| 15 | 備前国 | 百間川原尾島遺跡 | 75.0 | 73.8 | 101.62602 | 217.1 | 208.3 | | I 期 | ⅡA | | 12 | 229 図 -2061 |
| 16 | 備後国 | 草戸千軒町遺跡 | 83.0 | 80.0 | 103.75 | 246.8 | 242.2 | | I 期 | ⅡA | | 13 | 3 図 -5 |
| 17 | | | 87.0 | 78.0 | 111.53846 | 259.7 | 249.0 | | I 期 | ⅡA | | 14 | 7 図 -78 |
| 18 | | | 82.8 | 78.0 | 106.15385 | 232.8 | 219.7 | | I 期 | ⅡB | | 15 | 11 図 -86 |
| 19 | | | 82.0 | 83.0 | 98.79518 | 345.2 | 322.8 | | I 期 | ⅢB | | 16 | 6 図 -57 |
| 20 | | | 85.0 | 82.0 | 103.65854 | 274.9 | 265.2 | | I 期 | ⅢA | | 17 | 14 図 -110 |
| 21 | | | 79.8 | 75.0 | 106.4 | 221.9 | 212.8 | | I 期 | ⅢA | | 18 | 15 図 -142 |
| 22 | 安芸国 | 善福寺南遺跡 | 75.0 | 58.5 | 128.20513 | 118.6 | 113.7 | | I 期 | ⅢB | | 19 | 5-3 図 |
| 23 | 讃岐国 | 東山崎・水田遺跡 | 61.8 | 50.4 | 122.61905 | 92.0 | 88.1 | | I 期 | ⅢB | | 20 | 104 図 -139 |
| 24 | 阿波国 | 中庄東遺跡 | 72.3 | 59.4 | 121.71717 | 131.5 | 127.9 | | I 期 | ⅢB | | 21 | 575 図 -999 |
| 25 | 土佐国 | 坂本遺跡 | 79.2 | 72.0 | 110 | 278.3 | 258.4 | | I 期 | ⅢA | | 22 | 124 図 -2172 |
| 26 | 伊予国 | 湯築城 | 72.4 | 66.0 | 109.69697 | 162.7 | 156.2 | | I 期 | ⅢB | | 23 | 図 79-307 |
| 27 | 筑紫国 | 博多遺跡群 | 72.4 | 65.0 | 111.38462 | 154.9 | 150.5 | | I 期 | ⅢB | | 24 | Fig39-148 |
| 28 | 山城国 | 山科本願寺跡 | 86.4 | 75.6 | 114.28571 | 287.8 | 279.7 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 25 | 36 図 -101 |
| 29 | | | 83.7 | 75.6 | 110.71429 | 210.2 | 204.8 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 25 | 41 図 -108 |
| 30 | | | 90.0 | 74.4 | 120.96774 | 277.1 | 269.0 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 25 | 42 図 -109 |
| 31 | | | 90.0 | 79.2 | 113.63636 | 300.4 | 291.8 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 25 | 45 図 -114 |
| 32 | | | 83.2 | 79.2 | 105.05051 | 266.0 | 255.4 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 25 | 47 図 -117 |
| 33 | | 嵯峨野遺跡群 | 81.6 | 76.0 | 107.36842 | 259.3 | 249.1 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 26 | 図 55-210 |
| 34 | 摂津国 | 長辻遺跡 | 61.3 | 49.6 | 123.58871 | 71.2 | 67.7 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 27 | 図版 24-49 |
| 35 | | 兵庫津遺跡 | 97.0 | 82.5 | 117.57576 | 364.0 | 344.7 | | Ⅱ期 | ⅣA | | 7 | 66 図 -115 |
| 36 | | | 90.4 | 81.6 | 110.78431 | 328.8 | 319.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 6 | 図版 122-1064 |
| 37 | 和泉国 | 堺環濠都市遺跡 | 86.0 | 76.0 | 113.15789 | 263.5 | 254.8 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 28 | 77 図 -1 |
| 38 | 和泉国 | | 80.4 | 74.4 | 108.06452 | 206.6 | 200.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 29 | 33 図 |
| 39 | 和泉国 | | 63.6 | 51.6 | 123.25581 | 87.3 | 84.1 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 30 | 38 図 -36 |
| 40 | 紀伊国 | 川関遺跡 | 87.8 | 76.8 | 114.32292 | 275.2 | 266.6 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 31 | 141 図 -1488 |
| 41 | 河内国 | 天野山金剛寺 | 84.8 | 75.0 | 113.06667 | 292.0 | 281.4 | | Ⅱ期 | ⅣA | | 32 | 50 図 -428 |
| 42 | | | 87.9 | 82.8 | 106.15942 | 302.2 | 287.9 | | Ⅱ期 | ⅣA | | 32 | 52 図 -429 |
| 43 | 播磨国 | 円満寺東の谷遺跡 | 72.0 | 66.6 | 108.10811 | 152.3 | 146.6 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 33 | 図 234-2 |
| 44 | | 室津 4 丁目遺跡 | 75.8 | 80.0 | 94.75 | 267.7 | 254.8 | | Ⅱ期 | ⅣA | | 34 | 12 図 -3 |
| 45 | 美作国 | 久田・堀ノ内遺跡 | 84.6 | 78.3 | 108.04598 | 267.1 | 259.0 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 11 | 544 図 -1269 |

表 3 備前焼大甕集成表 2

| 番号 | 地域 | 遺跡名 | 器高 (cm) | 胴部 最大径 (cm) | 相対的 深さ | 全体容量 (L) | 頸部容量 (L) | 記載 容量 | 本稿の 時期区分 | 重根 編年 | 紀年銘 | 報告書 番号 | 管理番号 |
|----|-----|-----------------------|------------|-------------------|-----------|-------------|-------------|----------|-------------|----------|-----|-----------|------------------|
| 46 | 備前国 | すく毛山遺跡 | 66.6 | 57.2 | 116.43357 | 118.7 | 112.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 35 | 25 図 |
| 47 | | 百間川当麻遺跡 | 86.4 | 79.3 | 108.95334 | 270.4 | 256.1 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 36 | 109 図 -58 |
| 48 | 備中国 | 大村遺跡 | 66.4 | 56.0 | 118.57143 | 106.2 | 102.5 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 37 | 36 図 -76 |
| 49 | | | 66.4 | 58.4 | 113.69863 | 110.4 | 107.1 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 37 | 60 図 -176 |
| 50 | | | 64.0 | 60.0 | 106.66667 | 116.7 | 112.7 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 37 | 61 図 -177 |
| 51 | | 菰池遺跡 | 70.5 | 58.2 | 121.13402 | 110.2 | 104.2 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 38 | 64 図 -224 |
| 52 | 備後国 | 尾道遺跡 | 94.4 | 79.2 | 119.19192 | 313.4 | 305.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 39 | 9 図 -11 |
| 53 | 安芸国 | 廿日市町屋跡 | 70.8 | 63.6 | 111.32075 | 143.0 | 138.3 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 40 | 66 図 -314 |
| 54 | | 石佛遺跡 | 62.9 | 58.2 | 108.07560 | 107.7 | 101.1 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 19 | 1-101 図 -306 |
| 55 | | 善福寺遺跡 | 73.2 | 64.2 | 114.01869 | 160.9 | 153.7 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 41 | 4-8 図 -24 |
| 56 | 周防国 | 大向門前遺跡 | 60.0 | 48.6 | 123.45679 | 75.0 | 72.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 42 | 図 40-4 |
| 57 | | 庵河内遺跡 | 74.8 | 65.6 | 114.02439 | 158.1 | 153.3 | | Ⅱ期 | ⅣA | | 43 | 22 図 -71 |
| 58 | 長門国 | 長門国府 | 84.0 | 82.4 | 101.94175 | 308.0 | 296.9 | | Ⅱ期 | ⅣA | | 44 | 8 図 -7 |
| 59 | 讃岐国 | 香西南西打遺跡 | 71.0 | 62.4 | 113.78205 | 138.5 | 132.3 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 45 | 10 図 -38 |
| 60 | 讃岐国 | 東山崎・水田遺跡 | 91.8 | 87.6 | 104.79452 | 305.3 | 298.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 20 | 198 図 -596 |
| 61 | 阿波国 | 中庄東遺跡 | 69.0 | 60.0 | 115 | 135.5 | 129.3 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 46 | 図 572-996 |
| 62 | 土佐国 | 田村遺跡 | 66.6 | 61.2 | 108.82353 | 127.8 | 121.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 47 | 図 163-34 |
| 63 | 土佐国 | 弘人遺跡 | 69.6 | 58.4 | 119.17808 | 118.7 | 115.6 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 48 | 34 図 -252 |
| 64 | 伊予国 | 湯築城 | 67.3 | 59.1 | 113.87479 | 127.9 | 123.1 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 23 | 図 80-309 |
| 65 | | 道後今市遺跡 | 73.2 | 59.2 | 123.64865 | 136.8 | 130.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 49 | 図 135- NO.198 |
| 66 | | ウラショウジ遺跡 | 76.4 | 56.8 | 134.50704 | 89.9 | 84.0 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 50 | 37-067 (2 号墓) |
| 67 | | 西禅寺 | 92.0 | 80.8 | 113.86139 | 261.9 | 251.8 | | Ⅱ期 | ⅣA | | 50 | 37-064 |
| 68 | | 関住 | 72.8 | 65.6 | 110.97561 | 129.6 | 122.2 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 50 | 37-062 |
| 69 | 海中 | 水の子岩海底遺跡 | 76.2 | 73.8 | 103.25203 | 207.5 | 198.4 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 51 | 41 図 31-01 |
| 70 | | | 81.6 | 75.0 | 108.8 | 236.1 | 224.9 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 51 | 41 図 31-02 |
| 71 | | | 60.0 | 59.2 | 101.35135 | 115.6 | 109.1 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 51 | 46 図 32-01 |
| 72 | | | 70.0 | 62.1 | 112.72142 | 134.5 | 126.7 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 51 | 46 図 32-02 |
| 73 | | | 70.9 | 65.0 | 109.07692 | 156.8 | 146.0 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 51 | 46 図 32-03 |
| 74 | | | 68.8 | 62.0 | 110.96774 | 136.5 | 129.7 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 51 | 46 図 32-04 |
| 75 | | | 73.1 | 64.9 | 112.63482 | 152.3 | 145.4 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 51 | 47 図 32-05 |
| 76 | 筑紫国 | 博多遺跡群 | 80.0 | 70.0 | 114.28571 | 225.0 | 215.6 | | Ⅱ期 | ⅣB | | 52 | Fig19-27 |
| 77 | 山城国 | 山科本願寺 | 84.5 | 82.5 | 102.42424 | 298.5 | 281.6 | | Ⅲa 期 | VA | | 53 | 図 142-32 |
| 78 | | | 104.0 | 84.0 | 123.80952 | 373.3 | 358.7 | | Ⅲa 期 | VA | | 25 | 38 図 -103 |
| 79 | | | 98.0 | 84.6 | 115.83924 | 313.4 | 300.6 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 25 | 40 図 -106 |
| 80 | | | 91.8 | 81.3 | 112.91513 | 331.4 | 310.5 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 25 | 43 図 -111 |
| 81 | | 平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司) | 94.4 | 78.8 | 119.79695 | 312.4 | 290.7 | | Ⅲb 期 | VB | | 54 | 55 図 -1007 |
| 82 | | 平安京左京四条四坊三町 | 106.0 | 86.5 | 122.54335 | 408.3 | 375.2 | | Ⅲb 期 | VB | | 55 | 図 70-444 |
| 83 | | 平安京左京四条四坊一町 | 99.7 | 85.2 | 117.01878 | 349.6 | 329.2 | 参石入 | Ⅲb 期 | VB | | 56 | 図版 29-105 |
| 84 | 摂津国 | 沢の鶴大石蔵 | 104.0 | 79.5 | 130.81761 | 313.6 | 293.3 | | Ⅲb 期 | VB | | 57 | 40 図 -34 |
| 85 | | 御影波返し蔵 | 102.6 | 81.0 | 126.66667 | 361.5 | 335.7 | | Ⅲb 期 | VB | | 58 | p.13 |
| 86 | | 久宝寺寺内町遺跡 | 99.2 | 85.6 | 115.88785 | 362.8 | 331.4 | 参石入 | Ⅲb 期 | VB | | 59 | 32 図 -96 |
| 87 | | | 98.0 | 78.0 | 125.64103 | 299.2 | 275.6 | | Ⅲb 期 | VB | | 59 | 34 図 -102 |
| 88 | | | 100.0 | 77.2 | 129.53368 | 292.0 | 263.4 | | Ⅲb 期 | VB | | 59 | 34 図 -103 |
| 89 | | 津田城跡 | 74.2 | 56.0 | 132.5 | 110.4 | 100.1 | | Ⅲb 期 | VB | | 60 | 28 図 -16 |
| 90 | | 平野環濠都市遺跡 | 72.0 | 64.0 | 112.5 | 140.2 | 131.4 | 二入 | Ⅲa 期 | VA | | 61 | 図 2 |
| 91 | | 大阪城跡 | 94.0 | 79.5 | 118.23899 | 311.1 | 296.0 | 貳石入 | Ⅲb 期 | VB | | 62 | 図 9-11 |
| 92 | | 兵庫津遺跡 | 90.8 | 81.6 | 111.27451 | 320.3 | 303.0 | | Ⅲa 期 | VA | | 63 | 647 図 -583 |

表 4 備前焼大甕集成表 3

| 番号 | 地域 | 遺跡名 | 器高 (cm) | 胴部 最大径 (cm) | 相対的 深さ | 全体容量 (L) | 頸部容量 (L) | 記載 容量 | 本稿の 時期区分 | 重根 編年 | 紀年銘 | 報告書 番号 | 管理番号 |
|-----|-----|----------|------------|-------------------|-----------|-------------|-------------|----------|-------------|----------|-----|-----------|------------------|
| 93 | 和泉国 | 堺環濠都市遺跡 | 100.0 | 90.4 | 110.61947 | 435.9 | 415.6 | | Ⅲa 期 | VA | | 64 | 57 図 -3 |
| 94 | | | 97.6 | 84.8 | 115.09434 | 362.1 | 343.0 | | Ⅲb 期 | VB | | 65 | 319 図 |
| 95 | | | 104.8 | 88.6 | 118.28442 | 400.7 | 373.1 | | Ⅲb 期 | VB | | 65 | 320 図 -1 |
| 96 | | | 81.6 | 77.6 | 105.15464 | 249.9 | 235.8 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 65 | 321 図 -4 |
| 97 | | | 89.6 | 77.6 | 115.46392 | 278.8 | 266.1 | 二石入 | Ⅲa 期 | VA | | 66 | 109 図 -6 |
| 98 | | | 66.2 | 58.2 | 113.74570 | 104.3 | 99.3 | | Ⅲa 期 | VA | | 67 | 114 図 |
| 99 | | | 90.0 | 82.5 | 109.09091 | 328.3 | 309.9 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 68 | 裏表紙 |
| 100 | | | 105.6 | 82.8 | 127.53623 | 421.1 | 399.8 | | Ⅲb 期 | VB | | 69 | 12 図 -1 |
| 101 | | | 92.0 | 84.8 | 108.49057 | 322.6 | 306.3 | | Ⅲb 期 | VB | | 70 | 8 図 -8 |
| 102 | | | 91.2 | 76.4 | 119.37173 | 258.1 | 247.3 | | Ⅲb 期 | VB | | 70 | 8 図 -9 |
| 103 | | | 104.0 | 91.2 | 114.03509 | 413.7 | 392.8 | 三石入 | Ⅲb 期 | VB | | 70 | 9 図 -10 |
| 104 | | | 107.6 | 85.1 | 126.43948 | 373.1 | 352.8 | 三石入 | Ⅲb 期 | VB | | 70 | 25 図 -244 |
| 105 | | | 90.8 | 83.4 | 108.87290 | 330.0 | 308.3 | | Ⅲa 期 | VA | | 70 | 25 図 -245 |
| 106 | | | 98.4 | 84.6 | 116.31206 | 314.2 | 285.6 | | Ⅲb 期 | VB | | 30 | 32 図 -2 |
| 107 | | | 90.0 | 81.0 | 111.11111 | 314.7 | 295.0 | | Ⅲa 期 | VA | | 71 | 86 図 -243 |
| 108 | | | 89.3 | 81.0 | 110.24691 | 265.8 | 253.9 | | Ⅲa 期 | VA | | 72 | 24 図 |
| 109 | | | 92.0 | 76.0 | 121.05263 | 249.4 | 235.5 | | Ⅲb 期 | VB | | 72 | 26 図 |
| 110 | | | 102.0 | 86.0 | 118.60465 | 399.0 | 356.2 | | Ⅲb 期 | VB | | 72 | 27 図 |
| 111 | | | 94.5 | 80.0 | 118.125 | 321.5 | 304.7 | 二石入 | Ⅲb 期 | VB | | 72 | 49 図 |
| 112 | | | 91.0 | 86.0 | 105.81395 | 356.6 | 332.6 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 72 | 51 図 |
| 113 | 紀伊国 | 根来寺坊院跡 | 106.9 | 85.2 | 125.46948 | 441.7 | 418.3 | 三石入 | Ⅲb 期 | VB | | 73 | 16 図 -20 |
| 114 | | | 88.2 | 81.6 | 108.08824 | 298.3 | 262.1 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 74 | 図 5-77 |
| 115 | | | 99.6 | 82.8 | 120.28986 | 391.0 | 367.5 | 二石入 | Ⅲb 期 | VB | | 74 | 図 13-213 |
| 116 | | | 92.0 | 84.0 | 109.52381 | 340.2 | 325.0 | 二石入 | Ⅲb 期 | VB | | 75 | 図 69-555 |
| 117 | | | 92.0 | 81.6 | 112.74510 | 293.6 | 281.0 | | Ⅲb 期 | VB | | 75 | 図 78-684 |
| 118 | | | 84.0 | 79.2 | 106.06061 | 269.7 | 249.7 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 76 | 34 図 -162 |
| 119 | | | 84.0 | 78.6 | 106.87023 | 242.5 | 224.0 | 三石入 | Ⅲa 期 | VA | | 76 | 65 図 -327 |
| 120 | | | 91.2 | 80.4 | 113.43284 | 294.9 | 286.9 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 76 | 65 図 -328 |
| 121 | | | 85.0 | 76.0 | 111.84211 | 261.9 | 248.7 | 二石入 | Ⅲa 期 | VA | | 77 | 図 6 P-3 |
| 122 | | | 88.0 | 83.0 | 106.02410 | 319.6 | 302.2 | 二 | Ⅲa 期 | VA | | 77 | 図 6 P-4 |
| 123 | | | 95.0 | 80.5 | 118.01242 | 304.1 | 286.7 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 77 | 図 7 P-6 |
| 124 | | | 89.0 | 79.5 | 111.94969 | 271.8 | 258.4 | 二石 | Ⅲa 期 | VA | | 77 | 図 7 P-7 |
| 125 | | | 92.0 | 75.0 | 122.66667 | 251.9 | 240.8 | | Ⅲb 期 | VB | | 77 | 図 7 P-8 |
| 126 | | | 92.0 | 85.00 | 108.23529 | 310.4 | 290.5 | | Ⅲb 期 | VB | | 77 | 30 図 -122 |
| 127 | | 鳥居遺跡 | 93.4 | 81.2 | 115.02463 | 300.2 | 282.9 | | Ⅲa 期 | VA | | 78 | 14 図 -92 |
| 128 | 播磨国 | 加茂遺跡 | 94.4 | 80.8 | 116.83168 | 295.9 | 285.6 | | Ⅲb 期 | VB | | 79 | 36 図 -305 |
| 129 | | 本町遺跡 | 104.4 | 91.2 | 114.47368 | 465.2 | 440.4 | | Ⅲb 期 | VB | | 80 | 80 図 -C218 |
| 130 | | 姫路城下町遺跡 | 100.0 | 84 | 119.04762 | 361.3 | 336.6 | | Ⅲb 期 | VB | | 81 | 図 7-21 |
| 131 | | 江井ヶ島長楽寺 | 96.5 | 73.0 | 132.19178 | 271.1 | 258.9 | 二石入 | Ⅲb 期 | VB | | 資料 調査 | — |
| 132 | | 福田片岡遺跡 | 88.5 | 90.4 | 97.89823 | 355.8 | 332.8 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 82 | 挿図 253-2 |
| 133 | 淡路国 | 叶堂城跡 | 98.4 | 80.0 | 123.00000 | 296.8 | 280.7 | | Ⅲb 期 | V B | | 83 | 33 図 -89 |
| 134 | 備前国 | 片口団地窯跡 | 92.8 | 80.8 | 114.85149 | 296.3 | 278.8 | | Ⅲa 期 | VA | | 84 | 114 図 |
| 135 | | 周匝茶臼山城 | 81.0 | 80.4 | 100.74627 | 253.9 | 231.2 | 三入 | Ⅲa 期 | VA | | 85 | 34 図 -91 |
| 136 | 安芸国 | 万徳院跡 | 99.5 | 81.0 | 122.83951 | 341.8 | 324.7 | 二石入 | Ⅲb 期 | VB | | 86 | 11 図 -17 |
| 137 | 讃岐国 | 東山崎・水田遺跡 | 81.0 | 73.2 | 110.65574 | 205.6 | 196.8 | | Ⅲa 期 | VA | | 20 | 76 図 -95 |
| 138 | 阿波国 | 黒谷川宮ノ前遺跡 | 72.0 | 58.4 | 123.28767 | 119.1 | 114.9 | | Ⅲa 期 | VA | | 87 | 284 図 -854 |
| 139 | 伊予国 | 湯築城 | 84.4 | 77.8 | 108.48329 | 257.2 | 238.8 | | Ⅲa 期 | VA | | 23 | 図 93-400 |
| 140 | | | 89.8 | 79.5 | 112.95597 | 288.4 | 274.6 | | Ⅲa 期 | VA | | 23 | 図 94-402 |
| 141 | | ウラショウジ遺跡 | 84.8 | 75.2 | 112.76596 | 163.5 | 154.1 | | Ⅲa 期 | VA | | 50 | 37-067 (1 号墓) |

表 5 備前焼大甕集成表 4

| 番号 | 地域 | 遺跡名 | 器高 (cm) | 胴部 最大径 (cm) | 相対的 深さ | 全体容量 (L) | 頸部容量 (L) | 記載 容量 | 本稿の 時期区分 | 重根 編年 | 紀年銘 | 報告書 番号 | 管理番号 |
|-----|-----|---------------|------------|-------------------|-----------|-------------|-------------|-----------|-------------|----------|-----------------|-----------|-----------|
| 142 | その他 | 岡山県内 紀年銘資料 | 104.7 | 82.5 | 126.90909 | 360.0 | 337.5 | 参石入 | Ⅲb 期 | VB | 1571(元亀 2)年 | 84 | 9 図 -9 |
| 143 | | | 95.6 | 77.0 | 124.15584 | 257.3 | 236.2 | 貳石入 | Ⅲb 期 | VB | 1582(天正 10)年 | 84 | 10 図 -10 |
| 144 | | | 95.5 | 78.4 | 121.81122 | 311.3 | 293.3 | 貳石 五斗入 | Ⅲb 期 | VB | 1582(天正 10)年 | 84 | 11 図 -11 |
| 145 | | | 98.0 | 75.7 | 129.45839 | 282.8 | 262.6 | 二石入 | Ⅲb 期 | VB | 1582(天正 10)年 | 84 | 12 図 -12 |
| 146 | | | 92.4 | 78.0 | 118.46154 | 290.7 | 269.9 | 貳石入 | Ⅲb 期 | VB | 1583(天正 11)年 | 84 | 13 図 -13 |
| 147 | | | 93.5 | 76.2 | 122.70341 | 263.9 | 244.2 | 貳石 五斗入 | Ⅲb 期 | VB | 1583(天正 11)年 | 84 | 14 図 -14 |
| 148 | | | 104.8 | 80.4 | 130.34826 | 372.3 | 349.5 | | Ⅲb 期 | VB | 1594(文祿 3)年 | 84 | 15 図 -15 |
| 149 | | | 104.8 | 82.4 | 127.18447 | 452.7 | 435.8 | | Ⅲb 期 | VB | 1594(文祿 3)年 | 84 | 16 図 -16 |
| 150 | 豊前国 | 香月公民館 所蔵資料 | 104.4 | 82.8 | 126.08696 | 346.3 | 331.0 | | Ⅲb 期 | VB | | 88 | 28 図 -281 |
| 151 | 筑紫国 | 博多遺跡群 | 98.0 | 75.0 | 130.66667 | 270.8 | 254.2 | | Ⅲa 期 | VA | | 52 | Fig19-29 |
| 152 | 摂津国 | 久宝寺寺内町遺跡 | 101.2 | 80.8 | 125.24752 | 399.9 | 375.5 | | Ⅳ期 | Ⅵ A | | 59 | 32 図 -97 |
| 153 | | | 100.8 | 78.8 | 127.91878 | 316.0 | 292.5 | | Ⅳ期 | Ⅵ A | | 59 | 33 図 -99 |
| 154 | 和泉国 | 堺環濠都市遺跡 | 97.8 | 77.4 | 126.35659 | 260.0 | 246.8 | | Ⅳ期 | Ⅵ A | | 30 | 32 図 -1 |
| 155 | | | 75.6 | 51.6 | 146.51163 | 110.5 | 106.3 | | Ⅳ期 | Ⅵ A | | 30 | 31 図 -35 |
| 156 | | 並松町遺跡 | 76.8 | 65.1 | 117.97235 | 131.5 | 109.7 | | Ⅳ期 | Ⅵ A | | 89 | 66 図 -35 |
| 157 | 播磨国 | 姫路城下町遺跡 | 75.6 | 58.4 | 129.45205 | 131.6 | 116.6 | | Ⅳ期 | Ⅵ A | | 81 | 11 図 -43 |
| 158 | その他 | 岡山県内 紀年銘資料 | 105.5 | 80.5 | 131.05590 | 363.5 | 338.1 | | Ⅳ期 | VIA | 1598(慶長 3)年 | 84 | 17 図 -17 |
| 159 | | | 105.6 | 79.0 | 133.67089 | 275.0 | 256.8 | | Ⅳ期 | VIA | 1607(慶長 12)年 | 84 | 18 図 -18 |
| 160 | | | 100.8 | 78.6 | 128.24427 | 324.6 | 300.4 | 貳石入 | Ⅳ期 | VIA | 1610(慶長 15)年 | 84 | 19 図 -19 |
| 161 | | | 106.8 | 81.2 | 131.52709 | 350.0 | 313.4 | 貳石入 | Ⅳ期 | VIA | 1613(慶長 18)年 | 84 | 20 図 -20 |
| 162 | | | 96.4 | 67.2 | 143.45238 | 189.0 | 168.5 | | Ⅳ期 | VIA | 1619(元和 5)年 | 84 | 21 図 -21 |
| 163 | | | 83.2 | 50.5 | 164.75248 | 111.8 | 103.2 | | Ⅳ期 | VIA | 1624(寛永 元)年 | 84 | 22 図 -22 |

※集成表の「引用番号」は報告書一覧の番号に対応する。編年は重根 2014 を参考にした。

また、本稿における陶器製大甕の容量は「Simple Digitizer」を用いた座標読み取り²⁾を行い、そこで計測した座標を予め計算式を設定した Excel ファイルに読み込むことで容量を算出する。資料の計測位置は頸部水面時の容量(頸部容量)と口縁端部水面時の容量(全体容量)である(図 1)。

その他、本稿では陶器製大甕の容量以外に、器高と胴部最大径の計測を行い、そこで得られた器高と胴部最大径の計測成果をもとに相対的深さ³⁾を算出した。

3. 備前焼大甕の器形と容量の分析

(1) 備前焼大甕の容量分布と分類

まず、本稿を執筆するにあたって集成した 163 点の

備前焼大甕について、大甕の頸部容量に基づいて分類を行う。

集成した備前焼大甕の頸部容量を昇順に並べたものが図 2 である。ここから、備前焼大甕が 100 ℓ 以下から 400 ℓ 以上という幅広い容量分布を有していることがわかる。また、容量分布を詳しく観察すると、頸部容量が 170 ～ 195 ℓ の大甕を確認することができず、この空白範囲から備前焼大甕の容量分布は大きく 2 つのグループに分類できる。本稿ではこの容量分布から、頸部容量 195.0 ℓ 以下のものを 1 類、195.1 ℓ 以上のものを 2 類として分類する。

(2) 各時期における器形と容量の様相

次に、各時期における備前焼大甕の器形と容量の特徴を整理し、その変遷過程をまとめる(図3)。

I期の備前焼大甕は器高75.0cmを境にして1類・2類に区分することができ、その多くが器高80cm代、容量200ℓ代の大甕である。相対的深さは1類が105～130の範囲に、2類が100～120の範囲に大半が分布する。

II期の備前焼大甕は46点のうち26点が1類であり、1類の占める割合が全時期の中で最も高い。1類は器高が60～75cm、容量が100～150ℓ代に分布するものが大半であり、2類は器高が80～95cmで容量が250～300ℓの範囲に分布するものが多く確認できる。相対的深さは1類が105～125、2類が105～115の範囲に多く分布することから、1類が長胴型、2類が

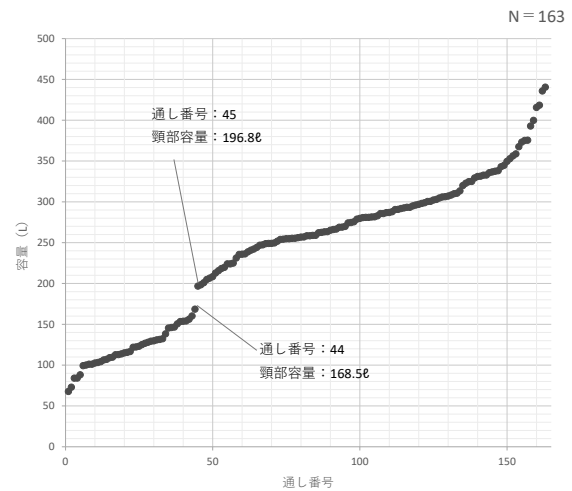
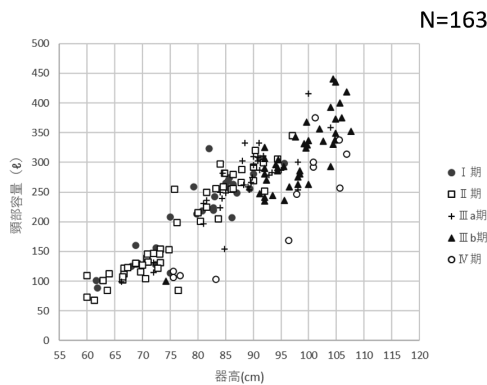
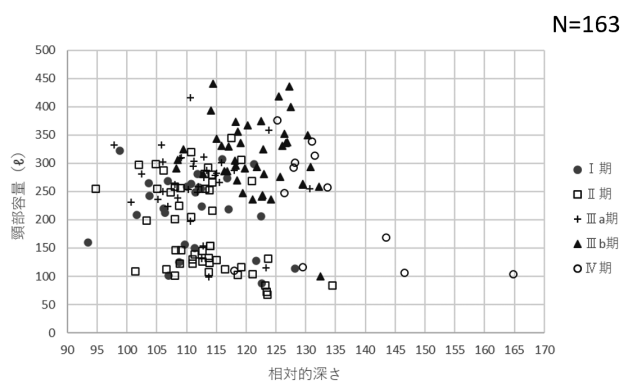


図2 備前焼大甕の頸部容量の分布



1- 器高と頸部容量の分布



2- 相対的深さと頸部容量の分布

| | | | |
|-------|---|--|--|
| I期 | <div>1類</div> <div>1</div> <div>2類</div> <div>2</div> | IIIb期 | <div>2類</div> <div>7</div> <div>8</div> |
| II期 | <div>1類</div> <div>3</div> <div>2類</div> <div>4</div> | IV期 | <div>1類</div> <div>9</div> <div>2類</div> <div>10</div> |
| IIIa期 | <div>1類</div> <div>5</div> <div>2類</div> <div>6</div> | <div>S=1/40</div> <div>1.久田・堀ノ内遺跡(13) 2.草戸千軒町遺跡(21) 3.大村遺跡(48) 4.長門国府(58) 5.堺環濠都市遺跡(98) 6.片口団地窯(134) 7.江井ヶ島長楽寺(131) 8.堺環濠都市遺跡(100) 9.並松町遺跡(156) 10.岡山県内紀年銘資料(161)</div> <div>※遺跡名の後に記載した括弧付きの番号は集成表の「番号」に対応する。尚、出典については報告書一覧・集成表の「引用番号」、「管理番号」を参照されたい。</div> | |

3- 備前焼大甕の器形と容量の変遷

図3 各時期における備前焼大甕の器形と容量の様相と変遷過程

寸胴型であるといえる。

Ⅲ期の備前焼大甕はⅢa期・Ⅲb期ともに器高80 cm以上、容量200 ℓ以上の2類に分類されるものがほとんどである。Ⅲa期の2類大甕は、器高80～95 cm、容量220～320 ℓの範囲に分布するものが大半であり、相対的深さが105～120の範囲に分布するものが多く確認できる。Ⅲb期2類大甕は器高がすべて90 cm以上であり、105 cmをこえるものも確認できる。容量は230～380 ℓの範囲に分布し、相対的深さは115～130の範囲に分布するものが多い。Ⅲa期とⅢb期を比較すると、前者は器高・容量が巨大化しつつもⅡ期と似たような器形特徴を有し、後者はⅢa期と比較してさらに器高・容量が大型化すると同時に、長胴化の傾向を強めたといえる。

Ⅳ期の備前焼大甕は資料数が少ないが、12点中5点が1類であり、1類の占める割合が高い。1類は器高が75～80 cm、容量が100～120 ℓの範囲に分布の集中がみられるが、器高が95 cm・容量160 ℓ代のものも確認できる。相対的深さは115～165の範囲に点在し、全体的に長胴型である。2類については器高が95 cm以上、容量が250前後～350 ℓの範囲に分布するものが多く、相対的深さは125～135の範囲に多くが分布することから、Ⅲb期2類資料と器高と容量の特徴が共通し、やや長胴化の傾向を強めたといえる。

以上のことから、備前焼の器形と容量は1類と2類で器形と容量が大きく異なることが確認できる。そして、全ての時代に普遍的に確認できる2類については、Ⅰ期からⅣ期にかけて器高の大型化に伴う連続的な頸部容量の増加と長胴化の傾向が確認される。特にⅢb期については、これまでの時代と比較して器形と容量の急激な変化が顕著に現れる。

4. 内容量記載資料の分析

(1) 内容量記載資料の年代と資料的特徴

本節では、内容量が記載された備前焼大甕について、内容量未記載資料と比較し、その資料的特徴を示す。

最初に、内容量記載資料の容量記載形式と年代について述べる。内容量を示す線刻が施された大甕はⅢa期、Ⅲb期、Ⅳ期で確認される。確認された大甕の線刻は「三石入を示すもの」「二石入を示すもの」「二石五斗入を示すもの」の3種類である。

「三石入を示すもの（三石入り大甕⁴⁾）」として分類される資料の表示形式は「三入」と「三石入」の2種類があげられる。「三入」の線刻はⅢa期にのみ確認できる。「三石入」の線刻はⅢa・Ⅲb期の両方で確認

でき、特にⅢb期に多く確認される。

「二石入を示すもの（二石入り大甕）」として分類される資料の表示形式は「二入」と「二石入」の2種類があげられる。「二入」の線刻は1点のみであるがⅢa期に該当するものが確認でき、「二石入」の線刻はⅢa期からⅣ期の広い時代で確認できた。

「二石五斗入を示すもの（二石五斗入り大甕）」についてはわずか2点であるが、Ⅲb期にのみ確認できた。この2点の資料はそれぞれ1582（天正10）年・1583（天正11）年の紀年銘が施されたものであり、資料数と線刻の特徴により、特注品のようなイレギュラーなものとして製作された可能性が高い。

以上のことから、備前焼大甕の容量表示形式の年代観をまとめると、内容量が記載された備前焼大甕はⅢa期、すなわち16世紀前半に出現し、「〇入」・「〇石入」の2種類の表示形式が認められる。「〇入」の表示形式はⅢa期に多くみられ、Ⅲb期には確認できないことから、16世紀前半の年代が与えられる。一方、「〇石入」の表示形式はⅢa期からⅣ期まで確認でき、明確な年代を与えることは難しいが、Ⅲb期以降の表示形式が全てこれになることから、「〇石入」の表示形式は「〇入」と比較して新しいものであると判断できる。さらに、線刻の表示については、三石入り大甕がⅢb期を最後に確認されなくなり、三石入り大甕は16世紀後半に途絶えると考えられる。

次に、内容量記載資料と未記載資料の容量を比較する。図4は各時期における内容量記載資料と未記載資料の頸部容量の分布を比較したものである。内容量記載資料は表示容量に関わらず、すべて195 ℓ以上の2類に該当する。同じ2類の内容量未記載資料と頸部容量を比較すると、Ⅲb期の三石入り大甕を除くほとんどの内容量記載資料の頸部容量が内容量未記載資料と同じ範囲に分布することから、内容量記載資料は備前

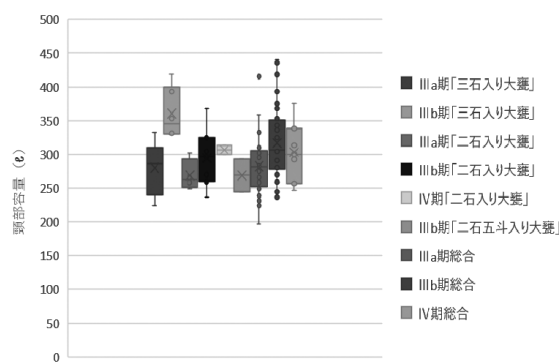


図4 内容量記載資料の分布

焼大甕の中で特別大きな製品でないといえる。また、内容量記載資料は未記載のものと比較して、頸部容量のバラツキが少ないことも確認でき、内容量記載資料が何らかの基準に基づいて製作されたと思像できる。

上記のことから、備前焼大甕の内容量記載資料の資料的特徴をまとめると、内容量記載資料は備前焼大甕全体では最大級の容量を有するものであるといえないが、頸部容量のバラツキが少ない、規格性を有する資料である。そして、内容量の表示形式に時期的特徴があり、容量を示す線刻から大まかな年代が与えられる。

(2) 内容量の分析

本節では、内容量記載資料の容量を分析する。

最初に、内容量記載資料の頸部容量の比較をととして、各時期の表示形式の示す容量について分析する。

第一に、先に示した図4の箱ひげ図の四分位範囲の分布から、内容量記載資料の表示形式は同時期の大甕に限り原則、三石入りの大甕が二石入りのものより頸部容量が大きく、「三石＞二石」の大小関係が成立していることが読み取れる。これは、三石入り・二石入りを示す線刻が両方確認できるⅢa・Ⅲb期で見られる関係である。しかし、二石五斗入りの大甕については、同時期であるⅢb期の二石入り大甕の中央値よりも低い位置に四分位範囲が分布することから、表示形式の大小関係が成立しない。これは二石五斗入り大甕の資料数の問題もあるが、同時代の内容量未記載資料と比較しても容量が少ないことから、二石五斗入り大甕が特殊な大きさを有するものである可能性が高い。二石五斗入り大甕の容量の特殊性に関する議論は今後の資料の蓄積に期待したい。

また、表示形式に注目すると、三石入り大甕・二石入り大甕の頸部容量は時代を下るにつれて増加を続けていることがわかる。特にⅢa期からⅢb期にかけての三石入り大甕の変化は顕著であり、中央値が約60ℓも増加している。それと同時に、Ⅲb期については三石入り大甕と二石入り大甕の容量の違いがより明確に表れているといえる。

次に、各時期の内容量記載資料について、表示形式に基づいて頸部容量を割り算し、線刻に示された容量の示す一石を分析する。

図5は各時期における内容記載資料の頸部容量を線刻の示す容量に基づいて算出した一石の分布をまとめたものである。まず、図5から読み取れる各表示形式の容量の様相を紹介する。

三石入り大甕については、Ⅲa期資料が示す一石が

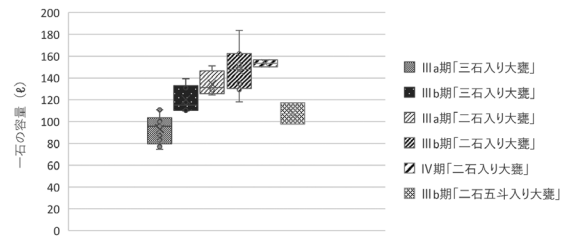


図5 線刻の示す一石の分布

75～120ℓであり、特に90.0ℓ以下、95.1～105.0ℓ付近に分布が集中している。Ⅲb期資料が示す一石は110～140ℓであり、特に105.1～120.0ℓ、130.1～140.0ℓの範囲に分布が集中する。

二石入り大甕については、Ⅲa期資料が示す一石が90～150ℓであり、特に120.1～135.0ℓの範囲に分布が集中する。Ⅲb期資料の一石は、120～185ℓであり、特に125.1～135.0ℓ、161.0～165.0ℓの範囲に分布が集中する。IV期資料については2点のみであるが、それぞれが示す一石は150.2ℓ・156.7ℓである。

二石五斗入り大甕については、Ⅲb期に該当する2点の一石が、それぞれ97.7ℓ・117.3ℓとなっている。

この内容量記載資料の一石を算出した結果、備前焼大甕の線刻に示された一石の値は、現在の一石（約180ℓ）と比較して小さいものが多い。このことから、備前焼大甕の線刻が示す一石は現在の一石と異なるものであるといえる。また、線刻が示す一石の分析から、備前焼大甕の容量に関する特徴が2点あげられる。

1つ目の特徴は、それぞれの線刻が示す一石の値が時代を下るにつれて大きくなることである。これは先に示したとおり、時代を下るにつれて頸部容量が増加することに起因するものである。

2つ目の特徴は、容量表示形式によって一石の値が異なることである。先に示した通り、二石入りの大甕の示す一石は、全時代をととして三石入り・二石五斗入りよりも大きい。このことから、それぞれの線刻で示された容量が共通の基準を有していないといえる。

以上が、内容量記載資料の容量に関する分析である。容量の分析から16世紀前半から17世紀前半の限られた時代の様相であるが、備前焼大甕の頸部容量や一石の値が変化していることなど、内容量記載資料の特徴を明らかにすることができた。特に、備前焼大甕の線刻が示す一石の値が現代の一石と比べて小さいという特徴は、備前焼大甕の容量が中世の基準に基づくことを端的に示し、容量理解への認識を改める必要を示すものとなるだろう。

5. 備前焼大甕の容量に関する考察と予察

(1) 備前焼大甕の器形と容量の変遷

第3章では、各時期における備前焼大甕の器形と容量の特徴を分析した。ここではその成果のうち、全時期で多く確認することができた2類に該当する備前焼大甕を中心に器形と容量の変遷をまとめる。

2類についてはⅠ～Ⅲb期で連続的に頸部容量が増加し、特にⅢb期の増加の幅が大きい。それに伴い、2類の器形は器高・相対的深さは高くなる。器高・相対的深さの変化を整理すると、Ⅰ～Ⅲa期はほとんど変化が確認されず、Ⅲb期では器高・相対的深さの両方が急激に高くなるという変化が確認できる。また、Ⅳ期については、器高・相対的深さがさらに高くなり、頸部容量にバラツキが確認される。このことから、緩やかな容量の変化の中で寸胴型の器形を維持する「Ⅰ～Ⅲa期」と、容量の急激な増加の中で長胴型の器形に変化させた「Ⅲb期」、器高・相対的深さがさらに高くなり容量分布にばらつきが生じる「Ⅳ期」というように、備前焼大甕の器形・容量の変遷の特徴は3つの時期に分けられる。

一方、1類に該当する備前焼大甕については、各時期の資料数に大きな差がみられるため、本稿ではⅠ・Ⅱ期の器形の特徴の紹介にとどめる。Ⅰ・Ⅱ期のものについては相対系深さが2類のものと比較して大きいことから、やや長胴型の器形を有するといった特徴がある。2類と比較して特にⅢa期以降は資料数が著しく少なくなるため、1類の備前焼大甕の分析は今後の資料の蓄積に期待したい。

(2) 内容量記載資料の変遷とその要因

第4章で行った内容量記載資料の分析では、16世紀前半から17世紀前半にかけての内容量を示す線刻が施された備前焼大甕の特徴を示した。それらを基に備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程とその要因を考察する。

まず、内容量記載資料の変遷過程についてであるが、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程はⅢa期とⅢb期以降の2つの時代に区分できる。

第一に、内容量記載資料が出現する16世紀前半に該当するのがⅢa期である。この時期の内容量を示す線刻の表示形式は「○入」・「○石入」と表記されるもののうち、特に「三入」と表記されるものが多い。当該期の内容量記載資料は16点集成しているが、そのうち12点が「三入・三石入」と表記された線刻を有する三石入り大甕であることから、この時代は「三石

入り大甕の時代」であるといえる。

そして、この内容量記載資料に転換期が訪れるのが16世紀後半、すなわちⅢb期である。この時期の内容量を示す線刻の表示形式は「○石入」と表記されるものに限定され、「○入」と表記されるものは確認できなくなる。さらに、二石五斗入り大甕を除く内容量記載資料15点のうち9点が「二石入」と表記された二石入り大甕であり、二石入り大甕が三石入り大甕の数を上回る。これは、三石入り大甕の紀年銘資料が1571(元亀2)年以降に確認できないことから、Ⅲb期中に三石入り大甕が姿を消すことを示しているといえるだろう。このことから、Ⅲb期は「二石入り大甕の時代」といえる。そして、17世紀前半に該当するⅣ期についても二石入り大甕が確認されることから、Ⅳ期はⅢb期の延長であると捉えられる。

このように、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程を示した結果、16世紀後半、すなわちⅢb期に転換期を迎え、この時期を境に表示形式など、その様相を大きく変化させていることがわかる。このⅢb期という時期は表示形式だけでなく、二石入り・三石入り大甕の頸部容量の差の拡大、内容量記載資料の容量が増加による線刻が示す一石の値の増加といった容量の変化だけでなく、先に示したように器形の変化も確認することができる。

このようなⅢb期に確認される変化から、筆者は16世紀後半に備前焼大甕の大規模な品質改良が起こったと考察する。Ⅲb期の三石入り大甕・二石入り大甕がⅢa期のものと比較して頸部容量の差が大きくなったこと、一石のバラツキが小さくなったことは備前焼大甕の容量表示の正確さを保証するための変化であったと捉えられる。また、Ⅲb期の備前焼大甕の線刻に注目すると、容量の表示形式が「○入」という表記から「○石入」へと変化していることをはじめ、「捻り土」という品質の良い土で製作された製品であることを示す線刻が施された大甕も増加することから、備前焼大甕の作りもⅢb期と比較して丁寧になっていることがわかる。以上の点から、Ⅲb期に確認される備前焼大甕の内容量記載資料の変化は、16世紀後半の品質改良による表示容量の正確さの保証・胎土といった様々な要素の高品質化をもたらし、それが器形の変化にも影響を与えたと考えられる。そして、この品質改良の背景には、他産地との差別化や桶・樽といった木製貯蔵具の普及による競争(伊藤・西上 1977、藤原 2000)が主な要因としてあげられる。備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程は、備前焼大甕が他産地の大甕や

桶・樽に対抗し、大甕が衰退する時代に生き残りをかけ、生存戦略を模索した様子を反映しているだろう。

また、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程で、三石入り大甕の衰退や一石の値の増加を説明したが、それらについては次節で予察する。

（３）備前焼大甕の容量と枡に関する予察

Ⅲ a 期からⅢ b 期にかけて、内容量記載資料の線刻の示す一石の値が大きくなることから、備前焼大甕が容量の基準とする枡（容量基準枡）が大型化したことが考えられる。これにより、備前焼大甕の頸部容量の増加は容量基準枡の大型化によるものであると説明できる。

この容量基準枡の大型化については、三石入り大甕の衰退の要因として説明できると筆者は考える。容量基準枡の大型化は必然的に頸部容量の大型化をもたらす。さらに、前節で述べた、Ⅲ b 期の品質改良の動きから、二石入り大甕と三石入り大甕の頸部容量の差がより顕著に現れ、Ⅲ b 期の三石入り大甕の容量はこれまでの時代と比較して格段に大きくなる。そして、巨大化した三石入り大甕は、大甕の大きさの限界を迎え、二石入り大甕の容量表示の保証のために姿を消し、結果二石入り大甕のみが継続的に製作されることになったというのが筆者の見解である。この見解については臼井氏も永祿期の三石入り大甕と慶長年間の二石入り大甕の容量が近似する要因を枡制の変革であると捉え（臼井 1984）、「京枡を採用したいわゆる三石甕は二石甕と呼ばなければならない（臼井 1984 67 頁）」と指摘している。このようにして、備前焼大甕の容量基準枡の変化が結果的に三石入り大甕の衰退の要因となったと結論付けることができるだろう。

では、この容量基準枡を変化させた枡は何であっただろうか、最後に内容量記載資料の容量基準枡について予察する。

先述の引用のとおり、臼井氏は備前焼大甕の容量表記が変化する要因を京枡によるものであると結論づけた。しかし、今回容量を分析した大甕のうち、一石の容量が 180 ℓ に達したものはわずか 1 点にすぎず、備前焼大甕の容量基準枡に京枡が採用された可能性は低いといえる。

さらに、三石入り大甕・二石入り大甕は一石の大きさが異なることから容量基準枡の大きさは異なることが推察される。これらを踏まえて本稿では、それぞれの容量基準枡について検討する。

まず、三石入り大甕の一石の容量は、Ⅲ a 期の平均

が 93.41 ℓ、Ⅲ b 期のものが平均 120.11 ℓ であり、現代の枡と比較して、それぞれ 0.52 倍・0.66 倍の容量である。この一石の容量を水鳥川和夫氏が算出した中世枡の容量（水鳥川 2010）と比較すると前者は宣旨斗（現代枡の 0.574 倍の大きさ、一石 = 103.32 ℓ）と近い値を得ることができるが、容量が 10 ℓ 近く異なるため、完全に合致するとは言い難い。後者については、該当するような枡を発見することができなかった。

次に、二石入り大甕の一石の容量については、Ⅲ a 期の平均が 134.43 ℓ、Ⅲ b 期の平均が 146.97 ℓ、Ⅳ期の平均が 153.45 ℓ であり、現在の一石との容量比はⅢ a 期が 0.75 倍、Ⅲ b 期が 0.817 倍、Ⅳ期が 0.853 倍となる。これらの一石の容量については、Ⅲ a 期・Ⅲ b 期の一石の容量が、水鳥川氏が算出した売升の容量（現代枡の 0.776 倍の大きさ、一石 = 139.68 ℓ）に近い値となる（水鳥川 2011）。Ⅳ期の一石の容量については、水鳥川氏の算出した売升の容量のほか、讃岐斗（現代枡の 0.924 倍の大きさ、一石 = 166.32 ℓ）の容量に近い値となる（水鳥川 2011）。ここであげた売升・讃岐斗は、中世後期から近世初頭にかけて西日本で標準的に使用された商業枡である（水鳥川 2011・2012）。

以上が、備前焼大甕の容量基準枡についての予察である。備前焼大甕の容量基準枡の同定はまだ議論の余地があるが、Ⅲ a・Ⅲ b 期の二石入り大甕の容量基準枡に売升が採用されていた可能性がある指摘できるだろう。特に、Ⅲ a 期からⅢ b 期にかけては二石入り大甕の一石が売升の値を超えるように変化していることから、Ⅲ b 期の品質改良の中で表示容量の正確さの保証が求められ、売升の値を満たすように容量が変化したと捉えることもできる。また、容量基準枡の特定が困難であったⅢ b 期の三石入り大甕についても、できる限り売升の容量に近づけようとした可能性があったことも推測できる。これらのことから、備前焼大甕の容量基準枡は西日本の広域で使用された売升であったと予察でき、16 世紀後半の品質改良の動きは、売升をもとにした規格の徹底を目的としたものであったと推察できる。備前焼大甕の容量は、中世後期の西日本広域で使用圏を確立した商業枡と関連する可能性があり、西日本の中世社会と連動するものであったといえるだろう。

おわりに

ここまで、備前焼大甕の容量について内容量記載資料を中心に分析し、考察を行った。中世全体の備前焼大甕の器形と容量の変遷については、各時期の分析資

料数の偏りという課題があるものの、器高・相対的深さ・容量の大まかな中世全体の流れを示すことができた。今後、本稿で示した備前焼大甕の変遷過程は、資料の蓄積によってより詳細に示すことができるだろう。さらに、本稿では触れなかったが、使用痕分析など大甕の用途に関する時期的特徴を示すことができれば、大甕の容量の変遷を機能的要因と関連付けて示すことができるようになることを期待される。

また、容量の分析については、備前焼大甕の容量量記載資料を中心に、それらの年代観を示し、容量の変遷過程とその要因について考察した。そして、その背景には 16 世紀後半の品質改良や西日本の広域で使用圏を形成した商業枡が容量基準枡として採用されていた可能性があるとする予察したが、資料数の問題や枡に関する議論など課題も多い。今後議論を進めていく必要がある。

このように本稿では備前焼大甕の容量に焦点をあてた分析を行ってきた。備前焼大甕の容量は製品の変遷や枡の変化を検討するうえで、有効な情報を内包していると示すことができる。備前焼大甕の容量に関するデータは、その他様々な情報と組み合わせていくことで、中世社会の様相を明らかにする手段の一つとして活用が期待される。

謝辞

本論は 2022 (令和 4) 年度、立命館大学文学部に提出した卒業論文を改変したものである。作成にあたり、木立雅朗先生・京都市立芸術大学の畑中英二先生から様々なご指導・助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

注

- 1) これまで内容量を示す備前焼大甕のうち、最も大きな容量を示す線刻は「三石九斗入」が確認されている (桂 1989)。
- 2) Simple Digitizer は藤巻晴行氏作成の画像数値化ソフトであり、画像の座標測定などに活用できる。また、ソフトで取得した座標データは CSV 形式で保存される (宮内 2017)。また本稿で扱う容量計測の方法は宮内 2017 の方法に従う。ただ、容量を算出するための Excel ファイルについては大甕の容量算出の正確性を確保することを目的に自作したものを使用した。
- 3) 相対的深さは器高／胴部最大径×100 で算出される。値が小さいほど資料が寸胴体型になり、値が

大きいほど長胴体型となる (渡辺 2010)。

- 4) 本稿で扱う「〇石入り大甕」という容量＋入り大甕という表記は、線刻によって容量が明らかになっている内容量記載資料を容量別に分類した総称であり、実際にこのような線刻が施されたものは確認されない。大甕の内容容量に関する用語としては「一石甕・二石甕・三石甕」が存在するが、これらの用語は大甕を大中小で区分するような、大きさを示す意味合いが強いため、本稿では内容量記載資料の容量分類の表記を全て「〇石入り大甕」とする。

参考文献

- 石岡ひとみ 2010 「四国出土の中世備前焼」 備前市教育委員会生涯学習課編『備前市歴史民俗資料館紀要 11: 備前歴史フォーラム資料集 鎌倉・室町 BIZEN』 備前市教育委員会生涯学習課 13-28 頁
- 伊藤晃 2008 「中世備前焼の全国制覇」 山陰中世土器検討会編『第七回山陰中世土器検討会資料集』 山陰中世土器検討会
- 伊藤晃・上西節雄編 1977 『日本陶磁全集 (10) 備前』 中央公論社
- 上西節雄 2001 「備前焼紀年銘資料の諸問題」 国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第 89 集』 国立歴史民俗博物館 653-669 頁
- 上西節雄 2002 『窯別ガイド日本のやきもの 備前』 淡交社
- 臼井洋輔 1984 「備前焼紀年銘入大甕の時代的特徴」 岡山県立博物館編『研究報告 5』 岡山県立博物館 49-76 頁
- 桂又三郎 1989 『備前 日本陶磁大系 10』 平凡社
- 堺市教育委員会 1984 『堺市文化財調査報告 20: 堺環濠都市遺跡発掘調査報告: 宿院町東 4 丁 SKT14 地点・調御寺跡 市之町東 4 丁 SKT19 地点 市之町西 3 丁 SKT20 地点 車之町東 1 丁 SKT21 地点』 堺市教育委員会
- 重根弘和 2003 「中世備前焼に関する考察」 近藤喬一先生退官記念事業会編『山口大学考古学論集: 近藤喬一先生退官記念論文集』 近藤喬一先生退官記念事業会 309-320 頁
- 重根弘和 2014 「中世備前焼の分類と分布」 佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学 第四巻』 雄山閣 9-28 頁
- 重根弘和 2022 「備前」 日本中世土器研究会編『新版概説中世の土器・陶磁器』 新曜社 249-264 頁
- 高瀬一嘉 2021 「土器容量の算出について — フリーソ

フトを利用した方法と有効性」『兵庫県立考古博物館研究紀要第14号』205-212頁

乗岡実 2001「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究』9 関西近世考古学研究会 104-116 頁

乗岡実 2010「15世紀から17世紀初頭の備前焼を消費した遺跡」備前市教育委員会生涯学習課編『備前市歴史民俗資料館紀要11：備前歴史フォーラム資料集 鎌倉・室町 BIZEN』備前市教育委員会生涯学習課 125-142 頁

藤原里香 2000「壺・甕から結物へ」小泉和子編『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局 73-97 頁

宝月圭吾 1961『中世量制史の研究』吉川弘文館

間壁忠彦 1990『備前焼』ニューサイエンス社

水鳥川和男 2010「中世畿内における使用升の容積と標準枴」社会経済史学会編『社会経済史学 75-6』社会経済史学会 585-606 頁

水鳥川和男 2011「中世西日本における使用升の容積と標準枴」社会経済史学会編『社会経済史学 76-4』社会経済史学会 525-545 頁

水鳥川和夫 2012「中世東日本における使用升の容積と標準升」社会経済史学会編『社会経済史学 78-1』社会経済史学会 99-118 頁

水ノ子岩学術調査団 1978『海底の古備前』山陽新聞社
宮内信夫 2017『Simple Digitizer を利用した容量測定方法について』（マニュアル）

渡部裕司 2010「山形盆地における古墳時代前期土師器甕の計測 ― 容量と形態の特徴について ―」山形県埋蔵文化財センター編『年報』山形県埋蔵文化財センター 50-57 頁

報告書一覧

各報告書に付与された番号は表2・3に掲載した引用番号と一致する。

1. 宇治市教育委員会 1985『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報8：宇治市街遺跡第2次発掘調査概報』宇治市教育委員会
2. 京都市埋蔵文化財研究所 2005『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8：平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所
3. 京都市埋蔵文化財研究所 2010『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-6：平安京左京八条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所
4. 京都市埋蔵文化財研究所 2014『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-16：平安京左京八条

一坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所

5. 大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2012『大坂城跡14』大阪市博物館協会大阪文化財研究所
6. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004『兵庫県文化財調査報告 270：兵庫津遺跡2（浜崎・七宮地区の調査）』兵庫県教育委員会
7. 神戸市教育委員会 2012『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会文化財課
8. 上西節雄 2001「備前焼紀年銘資料の諸問題」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第89集』国立歴史民俗博物館 pp. 653-669
9. 兵庫県立考古博物館 2010『兵庫県文化財調査報告 380：大野遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
10. 加西市教育委員会 1999『加西市埋蔵文化財調査報告 37：南上山遺跡』加西市教育委員会
11. 岡山県古代吉備文化財センター 2005『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192：久田堀ノ内遺跡2』岡山県教育委員会
12. 岡山県教育委員会 1980『岡山県埋蔵文化財報告 10：岡山県埋蔵文化財報告』岡山県教育委員会
13. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1977『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1976：草戸千軒町遺跡第18～20次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
14. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1979『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1977：草戸千軒町遺跡第21～23次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
15. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1987『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報：草戸千軒町遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
16. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1980『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1978：草戸千軒町遺跡第24～26次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
17. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1981『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1979：草戸千軒町遺跡第27次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
18. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1983『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1981：草戸千軒町遺跡第30次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
19. 広島県埋蔵文化財調査センター 1990『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 84：山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（5）5』広

- 島県埋蔵文化財調査センター
20. 香川県埋蔵文化財調査センター1992『東山崎・水田遺跡 1』香川県教育委員会
 21. 徳島県埋蔵文化財センター2009『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 74：末石遺跡 中庄東遺跡 2』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
 22. 高知県文化財団埋蔵文化財センター2008『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 103：坂本遺跡 14』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 23. 愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『埋蔵文化財発掘調査報告書 100：湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 24. 福岡市教育委員会 1992『福岡市埋蔵文化財調査報告書 281：博多 26』福岡市教育委員会
 25. イビソク関西支店 2017『イビソク京都市内遺跡調査報告 14：山科本願寺跡・左義長町遺跡』イビソク関西支店
 26. 京都市埋蔵文化財研究所 1997『京都市埋蔵文化財研究所調査報告 14：京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所
 27. 兵庫県立考古博物館 2010『兵庫県文化財調査報告 369：南辻遺跡』兵庫県教育委員会
 28. 堺市教育委員会 1989『堺市文化財調査報告 41：堺環濠都市遺跡発掘調査報告 大町東 1 丁 SKT 112 地点』堺市教育委員会
 29. 堺市立埋蔵文化財センター2002『堺市文化財調査概要報告 98：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT787 地点・熊野町東 2 丁』堺市教育委員会
 30. 堺市教育委員会生涯学習部文化財課 2008『堺市埋蔵文化財調査概要報告 117：堺環濠都市遺跡 (SKT929) 発掘調査概要報告』堺市教育委員会
 31. 和歌山県文化財センター2004『藤倉城跡・川関遺跡』和歌山県文化財センター
 32. 河内長野市遺跡調査会 1997『河内長野市遺跡調査会報 16：天野山金剛寺遺跡』河内長野市遺跡調査会
 33. 西安田長野遺跡調査委員会 1999『中町文化財報告 18-1：円満寺東の谷遺跡』西安田長野遺跡調査委員会他
 34. 兵庫県立考古博物館 2012『兵庫県文化財調査報告 414：たつの市御津町 室津四丁目遺跡』兵庫県教育委員会
 35. 岡山市教育委員会 1998『すくも山遺跡』岡山市教育委員会
 36. 岡山県教育委員会文化課 1981『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 46：百間川沢田遺跡 1：百間川長谷遺跡；百間川岩間遺跡；百間川当麻遺跡 12』建設省岡山河川工事事務所
 37. 岡山県古代吉備文化財センター1996『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 113：宮地遺跡 大木遺跡 大木古墳群 粧田山城跡 大村遺跡 3』岡山県教育委員会
 38. 岡山県古代吉備文化財センター1988『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 71：本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査 2』岡山県教育委員会
 39. 尾道市教育委員会 1980『尾道 1979』尾道市教育委員会
 40. 広島県埋蔵文化財調査センター1999『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 185：廿日市町屋跡』広島県埋蔵文化財調査センター
 41. 広島県埋蔵文化財調査センター1983『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 19：山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (1)』広島県埋蔵文化財調査センター
 42. 間壁忠彦 1990『備前焼』ニューサイエンス社
 43. 山口県埋蔵文化財センター1994『山口県埋蔵文化財調査報告 164：庵河内遺跡 上の山古墳群』山口県教育委員会
 44. 下関市教育委員会社会教育課 1979『長門国府』下関市教育委員会
 45. 高松市教育委員会 2000『高松市埋蔵文化財調査報告 46：香西南西打遺跡』高松市教育委員会
 46. 徳島県埋蔵文化財センター2009『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 74：末石遺跡 中庄東遺跡 2』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
 47. 高知県教育委員会 1986『田村遺跡群 第 9 分冊：本文 9』高知県教育委員会
 48. 高知県文化財団 埋蔵文化財センター2014『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 140：弘人屋敷跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 49. 愛媛県埋蔵文化財調査センター1985『道後今市遺跡昭和 60 年度 本文編』愛媛県教育委員会
 50. 中世墓資料集成研究会編 2005『中世墓資料集成 四国編』中世墓資料集成研究会
 51. 水ノ子岩学術調査団 1978『海底の古備前』山陽新聞社
 52. 福岡市教育委員会 2020『福岡市埋蔵文化財調査報告書 1396：博多 167』福岡市教育委員会
 53. 京都市埋蔵文化財研究所 1999『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 9 年度』京都市埋蔵文化財研究所

54. 京都府埋蔵文化財調査研究センター1995『京都府遺跡調査概報 63：平安京跡左京一条二坊十四町（左獄・囚獄司）発掘調査概要』京都府埋蔵文化財調査研究センター
55. 四門西日本・中部支社京都支店 2019『平安京左京四条四坊三町跡』四門西日本・中部支社京都支店
56. 文化財サービス 2021『文化財サービス発掘調査報告書 第20集：平安京左京四条四卯一町跡・烏丸御池遺跡発掘調査報告書』文化財サービス
57. 神戸市教育委員会 2001『兵庫県指定有形民俗文化財沢の鶴大石蔵発掘調査報告書』神戸市教育委員会
58. 神戸市教育委員会 2004『御影郷波がえし蔵』神戸市教育委員会文化財課
59. 八尾市文化財調査研究会 2005『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 80：八尾市文化財調査研究会報告 80』財団法人八尾市文化財調査研究会
60. 大阪府文化財調査研究センター2002『財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 71：津田城遺跡』大阪府文化財調査研究センター
61. 大阪市教育委員会 1984『昭和57年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会他
62. 大阪市教育委員会他 2019『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2017）第1分冊』大阪市教育委員会
63. 神戸市教育委員会 2010『兵庫津遺跡発掘調査報告書 1』神戸市教育委員会文化財課
64. 堺市教育委員会 1982『堺市文化財調査報告 10：東上野芝遺跡発掘調査報告 堺環濠都市遺跡発掘調査報告 新金岡更池遺跡発掘調査報告 — 第4次調査 鈴の宮遺跡発掘調査報告 — 第5地区』堺市教育委員会
65. 堺市教育委員会 1984『堺市文化財調査報告 20：堺環濠都市遺跡発掘調査報告：宿院町東4丁 SKT14 地点・調御寺跡 市之町東4丁 SKT19 地点 市之町西3丁 SKT20 地点 車之町東1丁 SKT21 地点』堺市教育委員会
66. 堺市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センター 1987『堺市文化財調査報告 35：堺市文化財調査報告 35』堺市教育委員会
67. 堺市立埋蔵文化財センター1997『堺市文化財調査概要報告 61：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT78 地点・銭鑄型出土地点の調査 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT380 地点・熊野町西1丁 石原町2丁遺跡発掘調査概要報告 IH2-1 地点』堺市教育委員会
68. 堺市博物館編 2012『堺出土の茶陶 備前焼』堺市博物館
69. 堺市教育委員会 1990『堺市文化財調査概要報告 4：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 市之町東4丁 SKT212 地点 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 南旅籠町東1丁 SKT240 地点 浜寺石津町東遺跡発掘調査概要報告』堺市教育委員会
70. 堺市立埋蔵文化財センター2005『堺市埋蔵文化財調査概要報告 109：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告』堺市教育委員会
71. 大阪府文化財センター2008『大阪府文化財センター調査報告書 177：堺環濠都市遺跡 1 (SKT959 地点)』大阪府文化財センター
72. 堺市市長公室文化部文化財課 2010『堺市埋蔵文化財調査概要報告 130：堺環濠都市遺跡 (SKT989) 発掘調査概要報告 堺区熊野町西1丁所在』堺市教育委員会
73. 和歌山県教育委員会 1979『根来寺坊院跡発掘調査概報 2』和歌山県教育委員会
74. 和歌山県教育委員会 1986『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会
75. 財団法人和歌山県文化センター1989『根来寺坊院跡』和歌山県文化財センター
76. 和歌山県文化財センター1994『根来寺坊院跡』和歌山県文化財センター
77. 岩出町教育委員会 2002『岩出町内遺跡発掘調査概報』岩出町教育委員会
78. 和歌山県文化財センター1991『鳥居遺跡発掘調査概報』和歌山県文化財センター
79. 姫路市教育委員会 1975『姫路市文化財調査報告 5：加茂遺跡』姫路市教育委員会
80. 姫路市教育委員会 1984『本町遺跡』姫路市教育委員会
81. 姫路市埋蔵文化財センター2020『姫路市埋蔵文化財センター調査報告 93：姫路城城下町跡』姫路市教育委員会
82. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1991『兵庫県文化財調査報告／兵庫県教育委員会編，第94冊 94：福田片岡遺跡』兵庫県教育委員会
83. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1992『兵庫県文化財調査報告 113：叶堂城跡』兵庫県教育委員会
84. 備前焼紀年銘土型調査委員会編 1998『備前焼紀

- 年銘土型調査報告書』備前市教育委員会
85. 吉井町教育委員会 1990『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書』吉井町教育委員会
86. 広島県教育委員会事務局教育部文化課中世城館遺跡調査班 1994『中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告 2：万徳院跡第 2 次』広島県教育委員会
87. 徳島県埋蔵文化財センター1995『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 9：四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 9』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団
88. 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1982『北九州市埋蔵文化財調査報告書 12：茶屋原西遺跡別冊』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
89. 大阪府文化財センター2012『大阪府文化財センター調査報告書 231：並松町遺跡』大阪府文化財センター

